

## ニコラ・プッサンの後期風景画制作に関する一考察

### —《オルフェウスとエウリュディケーのいる風景》を中心に—

瀧良介（東京大学）

従来の風景画論において、ニコラ・プッサン（1594～1665）の風景画は理知的な選択と抽出を経て構成された理想的な風景であるという説明がしばしば繰り返されてきた。しかし実のところ、膨大な研究が積み重ねられてきた今日においても、いまだプッサンの風景の構築作業の具体的様相が明らかにされたとは言い難い。その一因としては、彼の風景画に関する個別研究が、時にそこに挿入された物語や出来事の解釈に拘泥するあまり、風景描写それ自体に対する視野をおのずと狭めてしまっているという事情が指摘できる。

プッサンが1648年頃にフランスの銀行家・絹織物商人ジャン・ポワンテルのために制作した《オルフェウスとエウリュディケーのいる風景》（パリ、ルーヴル美術館所蔵）は、以上のような状況をもっともよく示す作品と言える。本作に関する先行研究の多くは、前景に挿入されたオルフェウスとエウリュディケーを含む群像の演じる悲劇的な出来事と、後景に描かれたサンタンジェロ城を思わせる城塞から立ち上る「不吉」な黒い煙の存在との意味的な連関を重要視しながら、画面の構想をもっぱらオルフェウスとエウリュディケーの物語の図像伝統との関わりのなかで論じてきた。しかしその議論は、物語や意味に回収され得ない風景それ自体の論理ともいべきものをいささか等閑視していると言わざるを得ない。こうしたアプローチは、一方で新たな知見を次々提出しつつも、いずれも風景をおよそ単なる背景幕ないし舞台装置としてしか捉えていない点で、一つの限界を示している。

本発表では、本作の構想に関して先行研究が暗黙のうちに前提としている「最初に物語ありき」という見解に疑問を投げかけ、風景の生成に際して物語内容とは独立した形成論理が働いていた可能性について論じる。具体的には、煙を上げるサンタンジェロ城の描写が、都市ローマの表象において伝統的に用いられてきた地誌的なアイコンともいべきものであったこと、さらに風景全体の構成が、ティツィアーノの素描に基づく「純粹」な風景版画である《乳搾りの女のいる風景》の影響を受けていることなどを提示する。

本作が制作された1648年から1651年にかけての期間は、元来物語画を得意としてきたプッサンが突如として風景画という絵画形式に急接近した時期であった。その動機を特定することは容易ではないが、本発表が《オルフェウスとエウリュディケーのいる風景》を通して提示するいくつかの事実は、やはり少なくともこの時期に彼が風景それ自体を描くことに積極的に価値を認め、意識的な風景画学習を行っていたことを物語る。このことは、本作をはじめとするプッサンのいわゆる「歴史的風景画」の研究に対して、物語ないし主題のそれにとどまらない多角的な分析を要請するものとなる。